

912.3
1

穀子 小 葉
生 花 似 柳

柳

木... 柳... 花... 葉... 枝... 幹... 皮... 根... 葉... 花... 葉... 枝... 幹... 皮... 根...



... 柳... 花... 葉... 枝... 幹... 皮... 根...

我... 返... 上... 人... の... 切... と... 傳... 花... 葉... 枝... 幹... 皮... 根...

と... 亦... 余... 別... よ... ひ... ら... あ... ち... 年... 万... 人... 本... 大... 定... 地...

生... の... 田... 札... と... お... 函... 祓... く... 流... 生... 火... あ... ら... へ... の...

び... 祈... 々... 上... 紙... の... 香... ひ... ひ... ひ... け... ち... 是... 下... り...

春の柳あけくは枝を山流しに 柳を

是頃の春の柳あけくはひたるをや

川原も水ごとく川をひ柳をらぬるを

それたるはさるの春をらぬるを

春をらぬるをさるの春をらぬるを

さるの春をらぬるをさるの春をらぬるを

さるの春をらぬるをさるの春をらぬるを

さるの春をらぬるをさるの春をらぬるを

さるの春をらぬるをさるの春をらぬるを

さるの春をらぬるをさるの春をらぬるを

さるの春をらぬるをさるの春をらぬるを

さるの春をらぬるをさるの春をらぬるを

さるの春をらぬるをさるの春をらぬるを

さるの春をらぬるをさるの春をらぬるを

さるの春をらぬるをさるの春をらぬるを

山後をたづねて今に 道のついでに
流る柳のけしきをいそいで
すまふ家もこれ家のまじり世にともあるを
もらさるるやかくて老人聖人の心か念
もつりつゝ世にともみゆらう梅木の
柳の古蹟よふかきとてまたきりく
ふ^たふやねら梅木の柳に致はるる

かりき家あり^上 ありのまじりけしき
は浅くとも梅木の舞うらうら初春の
み^切れもつらぬおもひから露はさう
ふ^上けなく 流水野故梅葉の柳
條ねとひつゝ新巻の心はうらうら
木の柳のけしきをいそいで
り^上引くつらぬおもひから露はさう

縁会みの性せの功力はひんれくちまこと
も仙果にむ家志を木の柳うおとともな
海に白髪のをく勿然とあつさむを
馬場子の柳さひふま花の柳心
感るはまも塚の草の尻朽木の柳花
木の幸よりをさぬまのうを人のまり
物衣とまけしけわらば孫からちるん也

七

柳さうまん志病のびじりも我治あまわ

り衣の目色夕暮の道ある人せしも老人
みくも地 ^長柳さびりのるるをせしんを
朽木の柳花の精 川流のあつあつを
非情を公の草をれもたむら草わく
^長申くちまも一念十善の柳さ一聲のら
生身 柳花のあつと 身はひく

甲
 一男一人念佛をたむ方はと一蓮生に比し
 生常を運びにたふのうらたひひとまこと
 生ひつらふ事とわづさ 釈迦とてんか
 城へ運動せむ生せん好施の出れと
 一の由らふては果にむとさ 南無
 危瀆濁の余頂礼を頼りつらひ海まきん
 世の虫類は身と似て力力の形は法

ハナハナトシテ

乃乃 ときりら故能にむん事一糸の
 舟れりあつとや 故者希の貨物うか
 ころや枯れく凡の喜に給く舟柳の原のこ
 以 驚殊のまそはふ乃糸けつる舟とこ
 ころころとせ舟舟の道是も柳の徳あり
 ころや 舟外舎宗花馬文おも 文宗の
 物振ち氣乃花とてあらぬ娘をぬる葉あら

そのこぼ陽や清のそらにけりてあそびを
しげ波とるひはありしあそびを
あそびの柳の柳うらまらに楊柳歌
とありて今に絶えぬはありて利をわ
たありてありてとらるるは地ありては
らるるのたまの山懸ありて蹴鞠の
西宮の本法をうれく書に載ありて

の音^{六上}柳^{六上}梅とありてあそびを
あそびのあそびありてあそびの
風のあそびありてあそびの
たありてあそびの柳の柳を
あそびのあそびありてあそびの
あそびのあそびありてあそびの
あそびのあそびありてあそびの

Handwritten text in cursive script on the top page of a manuscript. The text is written in black ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately seven lines of dense, flowing characters. Some characters are written in a more formal, upright style, while others are highly stylized and slanted. The overall appearance is that of a personal or working draft.

Handwritten text in cursive script on the bottom page of a manuscript. The text continues from the top page, maintaining the same dense, flowing style. It also consists of approximately seven lines of characters. The ink is consistent with the top page, and the paper shows signs of age and wear. The script is highly legible despite its cursive nature.

九
... ..
... ..
... ..
... ..

... ..
... ..
... ..

... ..
... ..
... ..
... ..
... ..
... ..
... ..

此神也して佛法いそ是いそるるをいふはいそなり
復いそ回いその復いそつと佛法とて海いそのみくもといそ
ゆ上名上ありて海いその津いそとてくもといそ
う上ありて海いその津いそとてくもといそ
ゆ上ありて海いその津いそとてくもといそ
ゆ上ありて海いその津いそとてくもといそ
ゆ上ありて海いその津いそとてくもといそ
ゆ上ありて海いその津いそとてくもといそ
ゆ上ありて海いその津いそとてくもといそ
ゆ上ありて海いその津いそとてくもといそ

山いその海いそ松いその本いそら我いそもいそ位いそをいそたいそるいそ
ていそるいそ先いそわいそらいそよいそきいそ越いそわいそれいそらいそもいそもいそ
たふらば小針西一は山とてい

海いその津いそとてくもといそ

案いそ内いその津いそとてくもといそ

右いそ席いその天いそ物いそをいそ立いそ領いそ是いそ案いそ坊いそ少いそくいそ作いそら

中いそ其いそはいそ同いそらいそりいそといそ後いそといそらいそ子いそ細いそくいそ先いそ

左いそ案いその津いそとてくもといそ

三十一

まろつ 唐室(口)入(口)色

扱(口)今(口)八(口)此(口)為

の法出(口)め(口)て

~~我(口)國(口)に(口)あ(口)る(口)を~~

我(口)國(口)に(口)あ(口)る(口)を

ま(口)ん(口)た(口)ら(口)し(口)て(口)あ(口)る(口)を(口)い(口)ふ(口)は(口)我(口)道

に(口)後(口)に(口)せ(口)ら(口)る(口)を(口)い(口)ふ(口)は(口)我(口)道

に(口)後(口)に(口)せ(口)ら(口)る(口)を(口)い(口)ふ(口)は(口)我(口)道

に(口)後(口)に(口)せ(口)ら(口)る(口)を(口)い(口)ふ(口)は(口)我(口)道

に(口)後(口)に(口)せ(口)ら(口)る(口)を(口)い(口)ふ(口)は(口)我(口)道

一(口)く(口)の(口)由(口)を(口)と(口)り(口)て(口)あ(口)る(口)を(口)い(口)ふ(口)は(口)我(口)道

先(口)に(口)ら(口)し(口)て(口)あ(口)る(口)を(口)い(口)ふ(口)は(口)我(口)道

先(口)に(口)ら(口)し(口)て(口)あ(口)る(口)を(口)い(口)ふ(口)は(口)我(口)道

先(口)に(口)ら(口)し(口)て(口)あ(口)る(口)を(口)い(口)ふ(口)は(口)我(口)道

先(口)に(口)ら(口)し(口)て(口)あ(口)る(口)を(口)い(口)ふ(口)は(口)我(口)道

けいふのうらなひ **口** みるあつたれさしきとけい

於密びんぐの西よりと 我亦あつたの類

うらなひ **口** みるあつたれさしきとけい

上 踊るうらなひ **口** みるあつたれさしきとけい

上 角を志れたゆひの法を海にそく **口** みるあつたれさしきとけい

上 志のたると **口** みるあつたれさしきとけい

かといふ **口** みるあつたれさしきとけい

約まら **口** みるあつたれさしきとけい

正しく **口** みるあつたれさしきとけい

海を **口** みるあつたれさしきとけい

うと **口** みるあつたれさしきとけい

けい **口** みるあつたれさしきとけい

公 **口** みるあつたれさしきとけい

り **口** みるあつたれさしきとけい

中
沈むを歎ぢひあらずや我がくもあらん
くはるたゞたゞ見佛何法のを結縁の
そによのこゑ道とせむらうらなげも界
高の身とるまをいへ佛歎法詠とる
うの~~身~~まじどびりともあひたれ来來形を
あえまらばう般那のちすいとえんがら
かうと縁乃ちのこの道果へん世

中
伸らまうらうらうらうたあまもくもあを
かうはまひとむらうらうたあまもくもあを
思ひのこゑいぢくかあんのこゑをたをみ
まのやんは院よひ者の座とらうらうらうら
乃利をんとまのらえを墓うらまれ
てら何割極りあんのこゑを法光にまをえん
えのこゑをれあるまを法乃ち今我あを

鳴鶴入らざるこころに飛ひ北つてこころに地よか
 らぬおつとすら北原の流北なるおとと
 きるはまをひすまをさぶらふおととに
 ちがひの神の今より後を尋ねまじと
 りふまをさぶらふおととのりづらまをさ
 こころにけしきとあらまをさぶらふおとと

小帳治

柰大臣是くして系流よはく人なるゆ楊れた

蔵大臣とく我事也相を御門今我事

持乃異をまのゆきとく三條志大臣少帳治

宗道よは心細とくをさゆへとくその宣方

只今成下とく心細凡大臣びくして宗道に

付とくあをぬひい人宗道我事今我

宗道よは心細とくをさゆへとくその宣方

るよるし事り流ひ 袂若とゆとま
給ふたじらぬ心ふく海まひをた
ろふあつ巻よのも 劔とらうとあせよ
と海よ流あつし ねふ けまはらえを
まらつとえもねとまきとくれ山あき
劔の勅も只今あつはらぬもあつ
わら海事たぬともふ書あつ 一七

を去あつあれた袂のまれり人まも
たふ色あり 城よひく かつ身まの
抱ふ世の伊ひく かけあつしひたふ
と雲のよ人の田劔の光り八行らつ
びみねあひおのりくまよふ 水劔も
かろひようかつふあつあはるるあつ
あつと 丈んまらぬのあひの劔若

Handwritten text in cursive script, likely a list or index. The characters are dense and difficult to decipher precisely, but appear to be organized into several lines. Some characters are written in a more formal style, possibly indicating specific entries or titles.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index. The characters are dense and difficult to decipher precisely, but appear to be organized into several lines. Some characters are written in a more formal style, possibly indicating specific entries or titles.

乃をみえわ海とぞひのけくゆ^ハ後よ
あ^トも^トあ^トの^トこ^トひ^トよ^トき^トん^トと^トん^トが^トよ^トか^ト
く^トら^トら^トた^トら^トら^ト此^ト川^トと^トあ^トつ^トく^トあ^トつ^トた^トた^ト
く^トら^トら^ト好^ト夜^トお^トと^トよ^トく^トあ^トひ^トを^トも^ト甲^トと^ト
め^トら^トえ^トあ^トら^トは^トら^トを^トさ^トら^トる^トう^トさ^トん^トと^トや^トき^トら^トの^ト
ん^トあ^トの^ト心^トは^トう^トよ^トり^トえ^トら^トう^トと^トと^トき^トあ^トは^トら^トく^ト
と^トは^トら^ト社^トを^ト月^トに^トあ^トわ^ト海^トの^ト此^ト事^トの^トれ^トと^ト

に^トあ^トれ^トの^トみ^トら^トも^トあ^トれ^トの^トま^トよ^トう^トあ^トり^ト物^ト名^ト
と^トあ^トら^トあ^トう^ト後^ト孫^トの^ト心^トと^ト上^ト夷^トに^ト方^トと^トか^ト
あ^トら^トう^トこれ^トの^トま^トの^ト心^トと^トひ^トあ^トら^トん^ト念^トを^トら^ト
に^トま^トし^トあ^トら^トと^ト融^トせ^トあ^トつ^トく^トら^トと^トう^トら^トひ^トて^ト火^ト
燃^トと^トら^トあ^トら^トて^トう^トら^トひ^トま^トし^トく^トら^トあ^トと^ト細^トと^トぬ^ト
り^トそ^トく^トあ^トら^トり^トと^ト拂^トひ^トら^トあ^トら^トひ^トの^トほ^トも^ト
う^トら^トあ^トり^トま^トの^トと^トは^ト方^トれ^トま^トら^トは^トな^トら^トへ^ト

Handwritten text in Arabic script, consisting of seven lines. The script is dense and cursive, typical of historical manuscripts. The text is written on aged, slightly yellowed paper.

Handwritten text in Arabic script, consisting of seven lines. The script is dense and cursive, typical of historical manuscripts. The text is written on aged, slightly yellowed paper.

Handwritten text in Arabic script, consisting of seven lines. The script is dense and cursive, typical of historical manuscripts. The text is written on aged, slightly yellowed paper.

Handwritten text in Arabic script, consisting of seven lines. The script is dense and cursive, typical of historical manuscripts. The text is written on aged, slightly yellowed paper.

て御殿とらなむのちりてららるる御殿と

ら 御殿のすまむらひにむらひて

うにわさるん 日らえに御殿のむら

らむらむらとらていれいむらむらむら

とむらむらむら 御殿のむらむら

の御殿とらむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむら

の御殿とらむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむら

物訓

日記詞

是を安房北清院よりせし僧也

此我未甲斐也と見え公程に甲斐國を

志す^木ゆゑの^木波の安房の^木す

立^木す^木浦の^木海^木の^木強念^木の^木上^木屋^木も^木て^木え

わ^木る^木精^木清^木の^木海^木も^木果^木の^木極^木す^木る^木持^木身^木

ち^木れ^木に^木知^木ら^木ま^木し^木一^木張^木の^木孫^木に^木茶^木進^木種^木と

枕をとりてくさくさの影れ物にみよひて
或は山道とて生にまよふなりりて
浮波の巻をきく 志の程に生原は
いづれよと審とわらふやうな物に
かす舞火の流れ周らといたせん
世中どうとあつてさうな人を
甚川に精はいあひの面をたねを
と

とる物に上は他とてあつてさうな
心とあつてさうなまはりの界さう
雲れとくさくさの影れ物にみよひ
我々それとてあつてさうな物を
おとぼるに 物にさうな舞火の
らそつとあつてさうな物にみよひ
今も先代と梅とさうな物にみよひ

あはれ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}
たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}
たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}たふ^{カク}

あまのついでよあまのついでよあまのついでよあまのついでよ

是はは舞のお傍れとてのいそや何とて

置あつちの海つらしてはの壺中なるか海り

いそ^{カク} いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}

いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}

海りのいそ^{カク} いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}

いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}

いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}

いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}

いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}

いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}

いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}いそ^{カク}

あつてのつづひのあひひに殺し老練の
甲たぐふ教を此事の所なるにせよとて
きふくちのいふ僧とておとすにけり
掃して作のよあつてお供あつて流り
は其時の精進のいふそつて成てい
生業の習ひあつて事いあつて死に
く成ていふ業をいふとて業といふ

我もこれいふに成ていふとて
付のあつてお供いふ今作られし生業
とてあつて下り業の同らふに殺し梅の
乃ちありつづひのあつてい州よ其いのか
つて精進いふ所あるにわつて殺し禁
ひれあつて精進いふとていふわつて
後代の例よあつていふとてあつて

みよむらういごまき後世ののちの物とり
ふみらういごまきとよのぐ殺あせれ利よは
せれよあせとひあつるを河たのふは合
魂^トうふ野中神のつれあはれをいへる
とらえなほいひまじと合強とらあ、若
ら、さるるるるの底まがはせり
まほいひとあせれとらえ FD 後世に

業因少記をづく証を真達少むす八能
かじ世に若とらあはれのとあを死物と
我れとらあはれとらたとらあはれとら
あはれとらあはれとらあはれとらあはれ
いそ河のつれあはれとらあはれとらあはれ
中事あはれとらあはれとらあはれとらあはれ
いそ河のつれあはれとらあはれとらあはれ

よもなありし者もよなる義舞火のともえごとし此の
くも戦くもひびきり月には成りてかきとよむ精
舟をかり彩漬く周りにまよふひめれぬ
海にさ波いたせん名おとよみ波いたせん
河瀬の石とむらひわけく妙かか法乃
田子と一石舟一字書付て波もた況あふ
らむがむらわんう海もろく人さあけらう海もろく

河へさるるまゝ瓦礫をたよわす眼赤の境界
西鬼邪にけり折返若者年のひいたふ
うは河舟をかきりけりまゝ飛とひさしお
てりさるる物とまゝし合紙とあらん事もま
て間者底にまゝしあひりしと二宿一宿の
功力にまゝし悪鬼を成座つを移か
弘誓言れあまの法華に山はれ物をも

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

粘生石

粘生石
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

上
 下
 雲の如き身は霞に似ていづれもあやうく
 浮世の勝つまはひの如くいとわづらふ
 くらゐの志もほげやあるまの心はなき
 にくひ 急こに病ひは是かがやわすれぬ
 の原にあらぬ かわくは僧のの衣は不
 とりなきよの世はほひと 持ちひおひられ
 といきらしよ心は海にひらけの心は とも

ちの如く殺せねとて 一回をよんで
 鳥取南院とふるに命はわす ぬらぬ
 一は殺しねとて ちろく ぬらぬ
 たらぬあはれ命はうらなふらぬとて
 扱ひねらるるにぬく殺しとて
 若者は南院のふらふは ぬらぬ
 の扱ひも乃はぬらぬあり

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの
いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの
いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

いふ所の事なき殿よの海よりなるるもの

ふ松のくさしをひきまのまもれあう身より
光とらちらして清涼殿と照りまれの光る
は清くあつととの屏風はたの戸開の夜
れみまあつと光ふる影をてひくよ
のまらありや 御門のれりも心懸とあり
せほのくふ安れれ森城うるのて妙物よ
よ松をたひひくは西廂のあつとあられ

玉法とこひきんくませとあつと調伏
のありあつとと幾まれとらまはよあひ
つまらありひきんくま化生とらあひ
あにあつとのまれあつとたたらあり
あつと松は清くあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

ありきや餘のあゝ念らるるのく善を
ありて因の成神とてひわりて
しわの船もや昔法あびの浅用の夕輝
表目をゆり夜も成くくさひの法あり
かきく夕園よりあゝるれくこのおとわ
一灯もわの影ありと云たぞそれゆりて
ゆくとわんこれせにかりやく長おんあ

一と申せよとて本園去まは成佛と因附
ら本よの似神とてせりばんやあゝりて
さうろの成仏とてひわりてくはと
向燒香し夜あよ向て佛とて守トゆ元
東救生夜とてせままのびるまのあゝり
ま今生く此あゝるるくはとて守ト
今生は女と成仏せよわ似神去如乃善ん

とちあふび拾取せよ本抄石よ精も水よ香
有んた大座にわらふらと今世わら
ふとわれぬるよわらぬと石魂忽り
わらぬ世のりあき海カミや八思法座な
はねうよわき光のうらとくみま八世干
葉カミつららあきららさま少さゆらん
ありカミ今ら海を流むらとあはくは

ららんきくあつたはけのあきざいの床を
ハ世まの床をくくと現に我物少くハ鳥
羽院乃玉藻の前ハ世も是カミ我ま法
とくまびげんがりハ世女の形とあつてお
神ひららるるをあつてハ世とわら別
命とらんをうらとあつて所よ世にわ
らあつてわらぬれあつてあつてあつて

乃あるとてと母をよほすはつとを
つがむんととらた祈りてと 感てと
神と若くあてく感いととあつとのと
元の家井よりきのうあふつ紙とび跡
あわくまよとびつと後親はあくとく
浦乃助出能の助あふんととあふれ
つがむの字をあふれのとと流せよとの

つがむとびて神手ハたよあふれといぬ
ひのととらてとて百目なとてあふる
た也物ね娘とあふあ助とらあふれ
てく移り跡あふれとのとあてあふ
あふらとあふれとあふれとあふれ
にわらすとあふれ人のあふれとあふれ
あふれつとあふれの下にらあふれとあふれ

よきをいふはあひのよきかたをいふ
もつれいふはけいふにあらばおぼ
ふとれ事多奉るれ今わいふに法
とけては後あるとふはあをわふら
とていふにけりさくさくわとあは
く鬼神のまをいふはさきり



右下係諸君性々板
行雖多言違章誤難
討勝今亦闕不善補
不足當流秘傳之加
拍字令改正者也

元禄二歳己初冬吉辰

日本橋南通三町目

川會屋書屋

